



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.229

2022.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第30回

『ワインとマッカリと… 一家根祥多さん追悼文集』

(家根祥多さん追悼文集刊行会 2002年)

立命館大学教授在職中、若くして急逝した縄紋晩期研究者の家根祥多(1953~2001)氏に対する恩師・同僚・友人・教え子などによる追悼文集である。氏は私より少し年下であり、「先学」ではないが、教養の幅広さと奥深さ、斯界への多大な貢献度において私などとは比較にならない学者であり、その点で、尊敬すべき「先学」と思っている。それにしても、この書籍に追悼文を寄せられた人たちのうち、家根氏の指導を受けていた若い(当時)学徒の顔ぶれを見ると、徳島大学の中村豊氏を始め、現在先史考古学研究的の第一線で活躍している研究者が目立つことに驚く。家根氏のひたむきな学問に対する姿勢と親身な教えに導かれた結果であろう。今回は紙幅の関係で、彼の詳細な略歴の紹介は割愛し、標記文献に書かれた諸氏の追悼文をつなぎ合わせて、家根氏の学問および問題意識の一端を覗いてみたい。

家根祥多は1953年神戸に誕生。幼少の頃は体が弱くていつも医者に通っていたという。ただし陽気な性格で、小学校では人気者だった。中学では数学部に入ったが、この頃から「真面目な性格」になったようだ。高校では弦楽部に所属し、チェロを演奏していたという(以上、弟さんの証言)。長じてはクラシック音楽のレコード(LP盤)を3500枚ほど所有し、ワインを飲みながら音楽を聴くことが最大の楽しみであったらしい。語学に堪能で、ドイツ留学をしているが、フランス語や英語も自由に操ることが出来たようだ(森本晋の証言からの推定)。韓国にも短期留学し、晩年にも再度かの地に留学する計画があったというので、韓国語をある程度話すことは出来たのであろう。哲学にも興味を持っており、「認識論」に関して同僚(小関素明・桂島宣弘)と激論を交わしていたという逸話もある。芸術面では、クラシック音楽のほか美術や詩にも造詣が深かったという。これほどの教養人は、現代日本の先史考古学者の中では決して多くないように思われる。

さて、家根は高校時代体調不良で一年間休学している。しかも一浪したので、京都大学には弟さんと一緒に進学する羽目となった。最短距離を歩くエリートではなく、紆余曲折を経て大成した学者であった。考古学にいつ興味を持ったのかは分からないが、学者になることは中学校時代に決めていたらしい。しかし、高尚な趣味を持つ家根が選りによって泥臭い考古学を選んだ理由は分からない。こつこつと資料を集め、入念に観察してデータを積み上げる「考古学」が家根の性に合っていたのだろう。家根の学問を考える上で象徴的なエピソードがある。学部の卒論で縄紋晩期滋賀里諸型式の型式学的編年研究に取り組む過程で、滋賀里遺跡出土土器の実査を行なったときのことである。それらの土器群は、滋賀県西大津駅(現・大津京駅)の高架下の倉庫に仮保管されていたのであるが、その倉庫は電気もなく、冬は寒く、夏は暑いところであった。家根はここを度々訪れ、倉庫の入口の自然光のもとで黙々と観察とメモを続けていたのであった(丸山竜平の証言)。

同じようなエピソードが大学院(博士課程)中退後にもある。神戸市篠原遺跡出土の膨大な数量の土器を、半地下式になった薄暗い倉庫のような場所で、ほとんど一人で拓本をとったり、実測図をとったりしていたというのである(田井中洋介の証言)。とは言え、家根は「蛸壺」に籠った研究者ではない。教え子には広い範囲にわたって資料を見せることを勧めている。家根自身は東北地方の亀ヶ岡式土器を見て回り、関東や九州・四国に何回も足を運んでいるし、韓国にも渡って資料観察を続けていたのである(宮地聡一郎・大塚達朗などの証言)。「土器は何万点と見ないと分からないよ」(石田爲成の証言)という教えは自身の体験に根差したものであろう。

家根の土器観察の実際はどうであろうか。「あとで大きく括るため、出来るだけ細かく土器を分ける。細かければ細かいほどいい。大括りするためにはまず細かく分ける必要がある」と家根は主張する(伊藤純の証言)。ただ、それを机上の操作で終わらせることはなく、綿密な層位確認を最優先させていたという(広瀬繁明の証言)。土器の観察ではどこを見るか。文様の観察は当然として、体部形態・器面の調整、粘土紐の接合状態、あるいは突帯の取り付け位置・突帯上面の刻目の形態も詳細に観察する(秋山浩三・玉田芳英の証言)。さらに底部も観察する必要があると教え子を指導している(坂口隆の証言)。「土器を型式学的に研究する上でどんな属性が、あとあと編年などの手がかりになるかわからないから、自分が見て取れる属性は(中略)すべて記述しておくべきだ」(川崎保の証言)というのである。

家根の言葉で感服する一言がある。ある土器について後進の学徒が所属型式を質問したところ、「う〜ん」と考え込んでしまった。それで「〇〇さんはこれを〇〇式と言っていましたよ」と言ったところ、「〇〇式ですか…聞かれてすぐ答えてくれる人ほど間違いが多いんですよ」と笑いながら答えたというのである(岩瀬彰利の証言)。土器の見学会などで、十分な根拠を示さず、たちどころに所属型式を認定してしまったことが私にもなかったとは言えない。自戒したい。ちなみに、かの山内清男も、中村五郎が持参した土器破片の過半について「わかりませぬ」を連発していたという(『画電点晴』10頁)。

家根は豊富なデータを踏まえた緻密な研究の先に、どのような体系を展望していたのであろうか。一つには、日本列島上の歴史的变化(縄紋式から弥生式への変化)を、人類史という視野に立って評価するということであろう(村上昇の証言)。おそらくドイツで学んだ、ヨーロッパ各地での農耕開始期に関する研究成果との比較を考えていたのではなかろうか(森本晋の証言から推定)。研究の緻密さ・視野の広さにおいて家根は傑出した研究者であった。家根を若くして失った日本先史考古学界の損失は多大である。家根の言行録ともいべきこの書籍は、家根の学問を学ぶ上で貴重なものであることを強調しておきたい。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第30回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第222回)	内海 遥 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第5回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「縄文海進 一海と陸の変遷と人々の適応」	野口真利江 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第5回)

山本 暉久

5. 大学での考古学 その2

大学入学前は、考古学へのあこがれはあったものの、わたしの考古学的知識は皆無に近かった。その点、若いときから遺物の蒐集や発掘調査に参加したりしていた、いわゆる「考古ボーイ」と比較すると、一步どころか格段の知識の違いがあった。その点を自覚しつつ、早く追いつかねばという気持ちから、独自に考古学の基本的知識を習得することを目指すこととした。入学当時から縄文時代の研究に興味をもってはいたが、まず一般的な知識が必要であるとの自覚から、概説書を読みあさることとした。『世界考古学大系』全16巻(1959~62、平凡社)という大部なシリーズ本のうち、とくに、第1巻~第4巻の日本編(1先縄文・縄文時代、2弥生時代、3古墳時代、4歴史時代)や、『考古学ノート』全5巻(1957~58、日本評論新社)、それと、入学年の1965年から刊行が開始され始めた『日本の考古学』全7巻(1965~67、河出書房新社)などを中心に精読することとした。

これら考古学関連書籍は、新刊本以外は古本屋などを通じて入手した。その当時、入手した書籍には、入手した年月日を記入していた。たとえば『考古学ノート 1 先史時代I無土器文化、2 先史時代II縄文文化』には、650715との記載があり、入学まもなく古本屋で購入したことが分かる。入手できない考古学関連の論文については、当時はまだコピー機が普及する以前であったため、図書館所蔵の文献を筆写することとした。いまでは考えられない非効率的な作業であるが、筆写して感じたことがある。それは、論文の書き手である著者の筆致(書きぶり)を直に感じ取れることであった。その点感心したのは、芹沢長介先生の文章である。1962年11月の『自然』第17巻11号(中央公論社)に掲載された「縄文土器の起源」を筆写して、先生の文章に魅了されたことをよく憶えている。芹沢先生の著作のなかで、とくに感動を覚えたのは、『石器時代の日本』(1960、築地書館)である(写真参照)。手元にあるこの書は、父君である「型絵染め」の大家、人間国宝・芹沢銈介の装丁による瀟洒(しょうしゃ)なデザインの箱入りの初版本で、神田の「慶天堂書店」で購入したもので、箱裏に650628との購入年月日が記載されてある。この書は、私にとっては、縄文時代研究のバイブルともなった。とくに本書に折込図として挿まれていた「実測図による縄文土器の編年」とその解説文は、縄文土器型式を知るうえで貴重なものとなった。当時、丸ペン(ロットリングなどという高級なペン先はまだなかった)を用いて薄いトレペーにトレースして、土器の特徴を頭のなかに叩き込んだことを記憶している。

その当時、縄文土器型式の知識は皆無に近かったから、先輩たちが、この土器片は「加曽利E式土器だな」などと会話しているのを横で聞いていて、おもわ

ず、「先輩、どうして加曽利E式と判るのですか?」などと質問したら、その答えは、「馬鹿でも判るんだよ!」とのご託宣(たくせん)であった。まさに「ウン?」である。これではまずい。縄文土器型式を真剣に勉強しなければとの気持ちとなったのである。

話は前後するが、わたしは『石器時代の日本』のなかに芹沢先生が書かれた「馬淵川のほとり 一岩手県雨滝遺跡調査日録一」が大変好きだ。発掘の醍醐味がふつつつ湧き上がる名文である。自分も早くこのような文章が書けるようになると思ったし、今でもそう思う。ほかに縄文土器型式の勉強には、江坂輝弥先生が雑誌『歴史評論』23~35号(1950~52、歴史科学協議会)に13回にわたって連載した講座「縄文式文化について」も、未完に終わっているが、大変役立った。この連載論文は、マイクロフィルムに複写されたものを青焼きしたもので、先輩を通じて入手したものである。また、『日本の考古学』I(先土器時代)とII(縄文時代)(1965、河出書房新社)は、当時の座右の書であり、とくに第2巻の『縄文時代』は書き込みだらけの、いまではボロボロの本になってしまった。今でも縄文時代を知る貴重な入門書である。この河出書房新社が刊行し始めた『日本の考古学』全7巻の以前に刊行された講座本に『日本考古学講座』全7巻(1955~56、河出書房)があるが、この講座本は、東大本郷にある「柏林社書店」で購入した。当時で9,000円ほどの高価なもので、買う(買える)かどうか、大いに悩んだ記憶がある。購入日は660108とある。

さて、大学入学早々に感銘を受けた考古学関連授業について触れておこう。それは当時理工学部教授であった直良信夫先生の授業である。先生は言わずと知れた「明石原人」の発見者であり、今で言う「動物考古学」の先駆者であった。たしか「日本先史地理学」というような講義名であったかと思うが、毎回の講義のさいに、風呂敷に包んだ書籍をたくさん持ち込んで、授業のさいに、それらを学生たちに回し見させてくれた。先生の蔵書の種類の豊富さを知ることができた。驚いたことには、先生は縄文時代人が食した鳥獣類は、そのほとんどを実際に食したとのことで、なかでも「モグラ」は不味いとの話であった。縄文人も「モグラ」は食したのかどうかさだかではないかと思うが、何ごとも、研究を極めるためには、実践が不可欠であることや先生が自ら観察しつつ描いた動物骨の精緻な図面など学ぶことが多く、文学部スロープを上がってすぐの小さな教室での授業は毎週大変楽しみであった。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英式記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



「石器時代の日本」箱表紙

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 222

アメリカ海軍病院跡 ～神奈川県横浜市中区

内海 遥

アメリカ海軍病院跡は横浜市中区山手町に位置する近代遺跡です。横浜市では、その土地柄もあり、ここ数年で近代の遺跡について発掘調査が複数件行われており、この遺跡もその一つです。私は教育委員会の職員として発掘に係る調整でこの遺跡に携わりました。

遺跡の立地する山手町は、「山手」の名のとおり高台に位置する丘陵地で、西側から続く下末吉台地の先端部に位置します。北側を大岡川水系の堀川、西側を同じく大岡川水系の掘割川により分断され、島状の台地が形成されています。台地の北側や南側の端部では、多数の貝塚が発見されており、古くから人々が暮らしていたことが窺われます。

さて、安政5年の日米修好通商条約によって港がアメリカに開かれたのを機に、横浜では欧米各国の人々が行き来するようになっていきます。そのような情勢で、山手町も、明治期に外国人居留地となり、洋風建築が建ち並ぶ街並みとなります。現在でも一部の建物は現存しており、指定文化財となっている建物もあります。

アメリカ海軍病院跡の立地する範囲は、明治4年にアメリカに海軍病院地所として貸与され、木造の病院が建てられました。その後明治41年に下田菊太郎が設計し、2代目のアメリカ海軍病院が建設されます。下田は、当時最先端のアメリカ本国の病院設備を直写するように設計を行ったことを自身の著書に残しています。2代目アメリカ海軍病院は、山手町を彩る洋風建築の1つとして大正時代を迎えますが、大正12年の関東大震災により建物は崩壊し、その後の変遷はよくわかっていません。

時代は令和となり、本地において公園整備の計画がもちあがったことにより、私はこの遺跡に携わることとなりました。当初は、震災後や戦後の開発によりの遺構の大部分は消滅していると考えていましたが、試掘調査で、良好に残った煉瓦の基礎の一部などを発見することができました。大学時代には旧石器時代を研究し、アルバイト等で参加した発掘調査でも江戸時代より新しい時代には触れてこなかった私にとっては、掘削土に混じる煉瓦やモルタルのかけら、バックホーのパワーに対して一切引けを取らない頑強な煉瓦基礎など、すべてが非常に新鮮な試掘調査でした。現代に残った病院の写真や航空写真を手掛かりに、試掘調査で発見された建物を推定する作業も、この時代の遺構ならではの体験でした。その後、関係部局との調整の後に発掘調査の実施に至ります。



▲写真1：アメリカ海軍病院跡

発掘調査は民間調査組織により実施され、私は調査の監理を行いました。調査の結果、当初の想定を遥かに上回る良好な保存状態のアメリカ海軍病院跡(写真1)が発見されました。定期的に調査現場に通うたびに、調査担当者から新しく発見された良好な状態の煉瓦基礎やモルタルの床、遺物等を報告された際の驚きは、今でも記憶に新しいです。

発見された病院は明治41年に建築された煉瓦づくりの2代目アメリカ海軍病院跡で、建物のおおよそ8割ほどの基礎が検出されました。2代目アメリカ海軍病院は半地下式の建物で、調査では半地下階の部屋の壁や床のほか、暖炉や埋設管、電線が確認され、当時の建築技法・素材、建物の配置を知る上で非常に有用な成果を得ることができました。埋設管には鉄製のものがあり、当時の日本においては最先端の技術が用いられていたことがわかります。また、ある部屋には白いタイルが貼られた壁(写真2)があり、他の部屋とは違う使われ方をしたことが窺われます。さらに、病院の基礎から数m離れた場所では縄文時代の集石が発見されました。距離は近いものの非常に時期差のある2つの遺構が並ぶ興味深い光景を忘れることができません。



▲写真2：タイル貼りの壁

特徴的な遺物として挙げられるのが大量に見つかったガラス瓶です。「MEDICAL DEPARTMENT U.S.N(アメリカ海軍医療部門)」の印字が施された例や、瓶の中に薬液や錠剤が残存している例があり、確かに病院で使用されていたことがわかります。数例の瓶は震災時の火災によりひしゃげており(写真3)、震災の被害状況を現在に伝えます。



▲写真3：熱でひしゃげたガラス瓶

病院ならではの遺物だと、他にも未使用の縫合糸や手術用の鉗子や膿盆、尿瓶が発見されています。保存状態が非常に良好で、使用されていた当時の状態を現在に伝える貴重な資料であると言えます。

この遺跡は、私が入庁して最初に携わった近代遺跡で、煉瓦基礎や英字ロゴのあるガラス製品、手術道具など、知らないことばかりでした。煉瓦の積み方や種類のほか、近代日本の歴史を、一から勉強したことを覚えています。今回の経験や調査成果を、今後横浜の埋蔵文化財に関わっていく中で活かしていきたいと思いを。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは齊藤麻那さんです。

考古学者の書棚

「縄文海進 ー海と陸の変遷と人々の適応ー」

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江 著／富山房インターナショナル(2022) ———— 野口 真利江

はじめに

本書と同様に、著者4人で「考古学者の書棚」をリレーさせていただき、遂に最終回となった。東京湾における縄文海進とそれに関連した遺跡の関係を、それぞれの視点から解説している訳だが、縄文海進初期の三浦半島(4章)から、東京一千葉(5章)、そして埼玉(6章)へと海域が拡大していく様子を、マガキ礁の存在に着目しながら章を繋いでいっている。勿論、各地域を代表する貝塚の紹介も随所に散りばめられている。どうか安心して、そして好きな場所(章)から読み進めていただきたい。

土器よりも石器よりも

縄文時代と言えば、考古学に少しでも興味のある人々にとって、縄文土器は決して避けることのできない花形の存在であるだろう。ところが本書では、縄文土器や土偶の写真はおろか、土器型式の特徴や編年もごく簡単にしか出てこない。石器についても同様で、その代わり貝塚から出土した貝類や魚類、漁具をはじめとする骨角器については、詳しく書かれている。これらの意図するところは1章で述べている。とは言え、土器型式の表記がないと年代観がピンとこない、あるいは土器型式を見ても年代観がよく分からないという人もいるだろう。読み進めていく上で、気になってくる海進と古環境の関係と、その年代観について、貝塚や土器型式との対応を55項の図19にまとめている。本書に出てくる貝塚の土器型式と年代観の対応もこの図19で確認できるようになっている。考古学を専門としない方や、これから学ぼうとするビギナーにとっても、きっと役に立つ図の一つになるに違いない。

遺跡から飛び出した考古学調査

一般的に考古学調査と言えば、遺跡の発掘調査や、その際に出土した遺物の整理作業などを指す。調査対象は遺跡内に限定されることがほとんどである。景観調査や古環境調査のために、遺跡周辺の地質調査を行うこともあるが、このような事例は少数派である。ところが、どういう訳か東京湾に係る考古学者の中には、当時の面影を求めて現在の東京湾に調査に出掛けていく人が多いような気がする。著者の二人の考古学者もその例に漏れないようで、マガキがマガキ礁を形成する前の様子や、現生マガキ礁の調査をしに、実際に干潟へと足を運んでいる。前者の生きているマガキのコロニーの様子は4章に、後者の現生マガキ礁の様子は口絵と、1章内のコラムと3章にそれぞれ載っている。どちらも縄文海進をより深く理解しようとする際に、重要な資料になり得る貴重な写真である。余談ではあるが、グラフィックス担当を含めた本書の著者6人全員が、一度は東京湾の現生マガキ礁の調査に参加している。このように著者全員をも魅了してしまうマガキ礁なのだが、ではなぜ、マガキ礁が重要なのか?この謎については、1～3章で詳しく解説している。

海と人、海と陸

縄文海進がもたらした海の恵みを、縄文人はどのように利用していたのだろうか。海と人との関わりは、貝塚という形で多くの情報を現代の私たちに伝えてくれている。貝塚の貝化石や魚骨類の組成からは、海域の拡大と海況変化が分かり、骨角器などによる漁具からは、陸上の資源を利用して海と積極的に関わってきた人々の様子を知る手掛かりが得られる。

海と陸の比高差が大きかった横須賀周辺では、マガキの他に、干潟に生息する貝から岩礁に生息する貝まで、多様な貝種が採取されていた。魚類に至っては、河川～海域を回遊する周縁魚から、外洋に生息するサメ類の他、イルカやクジラなどの海棲哺乳類といった実に様々な環境下に生息する海棲生物を捕獲していたことも分かっている。縄文海進によって、このような多彩な海域環境が広がっていった背景を、4章では地形と貝塚の関係から紐解いていく。

一方で、海と陸の比高差が小さかったであろう黒浜周辺でも、マガキは大量に出土するものの、岩礁性や外洋性の海棲生物については、横須賀ほど種類も量も多くなく、ほとんど出土しない。海進が進行していく過程で、貝塚から出土する貝類の組成は変化していくのだが、この貝類組成を生息環境に着目してみると、地域毎に特徴が異なることが分かってくる。生息環境に関する情報は、5章の図にまとめており、6章では奥東京湾と古入間湾における主要貝種の変化を時代毎にマッピングし、貝塚の広がりを図で示している。

過去から未来へ

海の恵みを広域にもたらした縄文海進も、やがて海水準の上昇から低下へと転じて、終焉を迎えることとなる(7～8章)。海進の末期から終焉までの記録は、自然科学分析が多くのことを教えてくれる。特に海域から陸への変化は、珪藻化石が得意とする調査方法の一つで、元々は地質調査などで用いられていた珪藻分析を、遺跡調査でも取り入れられ活用している。本書では、遺跡調査の中で行われた珪藻分析に加え、自然科学調査で扱われた珪藻分析や有孔虫分析、花粉分析結果なども合わせて紹介している。これらのデータが考古学調査に実際に役立てられた実例が詰まっている数少ない書籍である。

そして縄文海進以来、東京湾から姿を消していたマガキ礁が再び東京湾に出現した現代で、これからの環境変化と私たちはどのように向き合っていけばいいのだろうか。少なくともここ数年は、間違いなく海水温も気温も上昇傾向を示している。縄文人が経験した縄文海進を、現代を生きる私たちもそう遠くない将来に直面することになるだろう。

アルカ通信 No.229

発行日	2022年10月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp